

## 明治22（1889）年制作の丹後ちりめんの打掛

大 熊 明日香\*, 田 中 藍 衣\*, 常 見 美 紀 子\*\*

Characteristics of a Tango *Chirimen* (crepe silk) *Uchikake* (Japanese Wedding Robe) made in 1889 (Meiji 22)

Asuka Ohkuma\*, Aiko Tanaka\*, Mikiko Tsunemi\*\*

The present paper examines the weave formation, embroidery design, embroidery technique, and color of an *uchikake* (Japanese wedding robe) that was presented to Kyoto Women's University in 2008 by Shoko Inomoto, a graduate of the Department of History at the University, in view of the garment's historical value.

The *uchikake* was made in 1889 (Meiji 22) when Ms. Inomoto's grandmother, whose family owned a wholesale cloth store that specialized in Tango *chirimen* (crepe silk), was married to the Inoue family, which owned a weaving factory that produced Tango *chirimen*.

The *uchikake* is made of white *chirimen* with a complicated *donsu* (damask) weave pattern. The embroidery features symbols of congratulations, such as cranes and turtles, and the embroidery technique is very refined and technically advanced. The pale tones of the embroidery provide subtle contrast against the white fabric of the *uchikake*.

Because there are no surviving embroidered white cloth garments from the Meiji period and the weave formation of the *uchikake* donated by Ms. Inomoto is very rare *donsu* (damask) *chirimen*, this garment is of great historical value.

### 1. はじめに

本研究は、明治22（1889）年に丹後ちりめんの生糸問屋と織元の婚礼時に制作され、京都女子大学に寄贈された打掛について、白生地製の織技術、刺繍の技法、デザインについて調査し、この打掛の史料価値を裏づけることを目的としている。研究方法は、文献調査を中心に和装婚礼衣裳の歴史、丹後ちりめんの歴史、日本刺繍についての調査を行った。そこから史料の打掛と比較を行い、考察した。

本研究を行うにあたり、広義的な織物を示すちりめんについては漢字の「縮緬」を用い、丹後地域で製織されたちりめんについては「丹後ちりめん」と平仮名で表記した<sup>1)</sup>。

### 2. 打掛の経歴

本論に入る前に、研究対象となる打掛の経歴にふれる。

打掛は、明治22（1889）年丹後ちりめんの生糸問屋（京都府与謝郡野田川町）であった牛田家から、丹後ちりめんの織元（京都府与謝郡加悦町）の井上家に嫁いだ時に製作された。その後、昭和9（1934）年、井上家の六女寿子氏（大正2年生）の婚礼時に着用し、昭和41（1966）年、寿子氏の長女である祥子氏（昭和17年生）が嫁ぐ時に着装した。そして最後に使用したのは、昭和46（1971）年、祥子氏の妹の結婚式である（図1）。このように、打掛は3代にわたって受け継がれ、約120年の時を経て本学史学科を御卒業した伊野

本祥子氏により、平成20(2008)年本学に寄贈された。

明治22(1889)年に着装した伊野本氏の祖母の身長は150cmに満たないほどであり、昭和46(1971)年に使った伊野本氏の妹は163cmであった。このように身長差があるため、着用すると着丈が短めとなっている。下着には紅白の2枚重ねを着用しており、生地は綸子、柄は立涌であり、紅白ともに同じ柄である。図1では着用していないが、婚礼時には頭に角隠しを被っていた。



図1 昭和46年 結婚式

### 3. 婚礼衣裳について

次に史料の打掛が明治期にどのような位置づけであったのかを検証するため、婚礼衣裳の歴史についてみていく。

#### (1) 室町時代

日本において結婚の儀式が重要視されはじめたのは室町時代以降である。婚礼時に着装する打掛とはもともと、平安時代のうちぎの姿を真似たもので武士の婦人の礼装であった。まず、室町時代の婚礼衣裳についてみていこう。室町時代に入ると婚礼の法式が定められ白打掛に白小袖の制が行われた。『婚礼法式』<sup>2)</sup>の記述からも将軍などの高位の家の婦人は白練の裕、白の小袖、幸菱文様の打掛を着用した白無垢姿であったことがよみとれる。

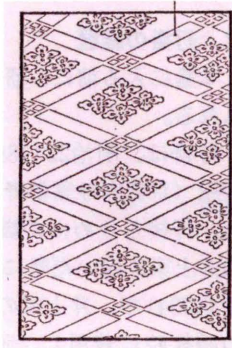


図2 幸菱紋

#### (2) 江戸時代

江戸時代の婚礼衣裳は上流から中流へと浸透していく傾向にあり、武家などの上流階級花嫁は室町時代の婚礼衣裳を踏襲し白無垢を着用していた。『貞丈雑記』<sup>3)</sup>にも室町時代と同様、幸菱文の白無垢が着用されていたことが記されている(図2)。

色直しの衣裳は『婚<sup>こん</sup>れいけしぶくろ<sup>ろ</sup>』(1750)年<sup>4)</sup>の記述から婿や舅姑から贈られた地赤、地黒の小袖が着用されたことがわかる。そして江戸時代後期には下から白紅黒と襲ねる着方が婚礼の色直しの場でみられ<sup>5)</sup>るようになり、<sup>さんまいがさね</sup>三枚襲<sup>さんまいがさね</sup>と称された(図3)。



図3 田中本家に伝わる江戸後期(19世紀)の松竹鶴亀紋様打掛

#### (3) 明治~昭和時代

明治時代に入ると婚礼衣裳として振袖を着用するようになった。この時代も打掛は上流階級の女性が着用するものであり、一般家庭の花嫁は黒縮緬に五つ紋の振袖姿であった(図4)。明治42(1909)年に発行された『風俗画報402号』に今川橋松屋呉服店陳列の婚礼衣裳が掲載されている。



図4 婚礼衣裳の黒振袖

この陳列では婚礼衣裳を真行草に分けており、真の礼服として唐衣に袴姿、行の礼服として白無垢姿、草の礼服として振袖姿が紹介されている(図5)。この陳列写真と同様のものが、大正時代に発行された『現代結婚宝典』<sup>6)</sup>にもみられることから、明治・大正の婚礼衣裳に変化はほとんどなかったといえる。



図5-1 真の礼服



図5-2 行の礼服



図5-3 草の礼服

江戸時代から打掛は上流階級の花嫁が着用するものであった。これは明治時代も変わらず、打掛を着用できたのは上流階級や裕福な家庭の花嫁であった。よって史料の婚礼衣裳も白打掛であるこ

とから、制作した家庭も丹後ちりめん隆盛期の豪商であり裕福であったことがうかがえる。

#### 4. 丹後ちりめん

ここでは史料の打掛には丹後ちりめんが用いられているため、縮緬について論述する。

丹後地方において縮緬が製織され始めたのは享保5(1720)年である。縮緬の製織技術は、天正年間(1573~1592年)に明(中国)から大阪の泉州、堺、に伝わった。そして天和年間(1681~1683年)には京都の西陣で製織され始め、その後丹後へ縮緬の製織技法がもたらされた。

縮緬とは一般に絹のちぢみ織物のことを指す。経糸に撚りのない生糸を、緯糸に強撚糸の生糸を用いて平織にし、精練によってしぼを作り出した絹布の総称である。しかし時代を経て改良され、現在は糸の撚りを変えることでしぼのない織物のことも「縮緬」と呼んでいる。今回取り上げた打掛もしぼのない縮緬の白生地を用いている。丹後ちりめんについては、寛政元年の『絹布重宝記』に「丹後縮緬」という名称表記がみられるが、「丹後ちりめん」についての厳密な定義はない。現在丹後地域で製織された縮緬のことを地域の名前を付して「丹後ちりめん」と呼んでいる。

### 5. 考察と結果

#### (1) 白生地の織組織

次に史料の打掛に使用された白生地の織組織について述べる。

史料の打掛の白生地を見てみると、地の部分に光沢があり、文様の部分には艶がないことがみてとれる。図6は顕微鏡で撮影した白生地の織組織である。

図6から、地の部分は経糸で、文様の部分は緯糸で表されていることが分かる。また、地の組織を拡大してみると、経糸と緯糸が5本で入れ替わっている(図7-1)。そのことか



図6 顕微鏡による白生地の織組織

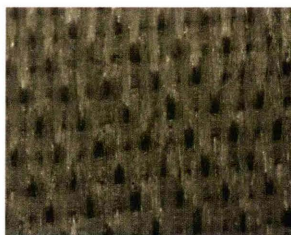


図7-1 地部分 拡大図



図7-2 経五枚縹子

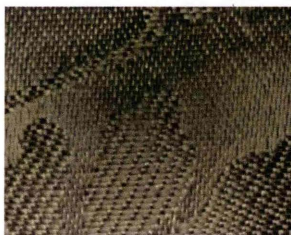


図8-1 文様部分 拡大図

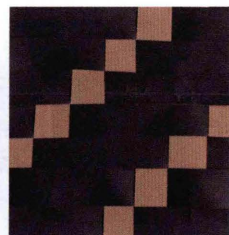


図8-2 緯五枚綾組織

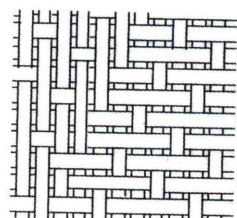


図9-1 一般的な緞子組織



図9-2 打掛の緞子組織

ら地は「経五枚縹子組織」(図7-2)であると推察した。一方、文様の部分(図8-1)は、うねが5本でずれながら交錯していることから「緯五枚綾組織」(図8-2)であると判断した。

これらのこのことを総合すると、白生地は「緞子縮緬」であり、組織は地が「経五枚縹子組織」、文様が「緯五枚綾組織」で構成されていると推察した。

一般的に、緞子縮緬とはたて糸、よこ糸ともに「五枚縹子組織」の表と裏で文様を織り出すものを指す(図9-1)。しかし製織の際の紋紙の糸の通り具合から、史料の様な構成であっても「緞子縮緬」である(図9-2)。このことから、史料は白生地の織りにこだわった珍しい打掛であるといえよう。

## (2) 白生地 of 文様

白生地には様々な文様が表わされている。ここで白生地に表されている文様について考察していきたい。

まずみてとれるのは、菊唐草文様である(図10)。この文様は中国が発祥の地であるが、日本で菊花が皇室の紋章に利用されたこともあり、中世以降は最も格式のある唐草文様の代表とされてきた。また、弓岡勝美『着物文様事典いろは 明治・大正・昭和の着物、帯の図柄』<sup>7)</sup>によると、明治時代初期には菊唐草文様がおおいに流行した。

さらに亀甲の中に施されている模様を熟視すると、2つの文様を確認することができた(図11-1、図12-1)。これらの文様は亀甲の周りを囲んでいる菊唐草や鶴と比べ、非常に抽象化された模様となっているため判別することが難しい。そこで亀甲の中の文様に色をつけ比較を行い、どのような文様が施されているのか検証していく。



図10 菊唐草文様

から長い首があり、そこから胴体、大きな羽をみてとることができたことから、「鳳凰」であると推測した。

このような抽象化された鳳凰の図案は明治時代や大正時代の図案集で確認することができる。『萬國圖案大辞典』<sup>8)</sup>に図11-3のような鳳凰の図案が表記されている。



図12-1 龍

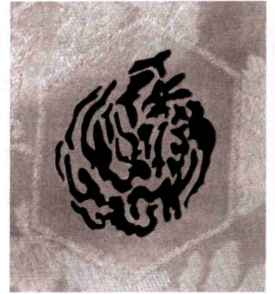


図12-2 龍(色つけ後)



図12-3 類似した抽象的な龍

また、図12-1に同じように色をつけたものが図12-2である。こちらと同じく目、口が確認でき、頭から筋が入っているような長い首を見ることができた。

こちらもまた、『萬國圖案大辞典』<sup>9)</sup>に類似した抽象的な龍の図案(図12-3)を確認できたことから、「龍」であると判断した。

亀甲は六角形を繋いで表される幾何学模様である。亀の甲羅に似ていることから吉祥文として広く利用され、史料の打掛にも見られる文様である。

最後に、亀甲の周りを囲んでいる鶴を比べてみる。鳳凰と推測した文様が中心に描いてある亀甲の周りには、3羽の鶴が内側を向いて飛んでいる(図13-1)。それに対し、龍と推測した文様の亀甲の周りを飛んでいる鶴は、3羽とも外側を向いて飛んでいることが分かる(図13-2)。鶴は長寿の象徴である。また、亀や松竹梅などと共に用いられることもある吉祥文である。



図11-1 文様1

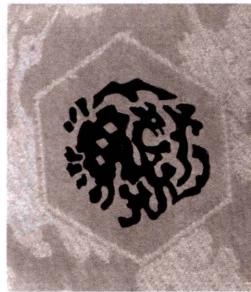


図11-2 鳳凰(色つけ後)

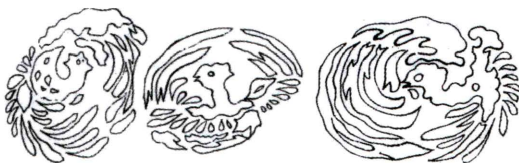


図11-3 類似した抽象的な鳳凰

図11-1に色をつけたものが図11-2である。これを見てみると、口ばし、目などが確認できた。頭

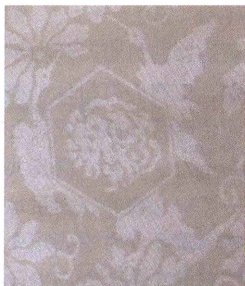


図13-1 内向きの鶴



図13-2 外向きの鶴



図14-1 打掛(前)

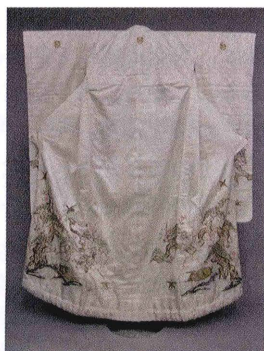


図14-2 打掛(後)

史料の打掛には、鶴、亀、松竹梅の吉祥文様が刺繍で表されている。そこで次に刺繍のデザインやデザインがもつ意味合いについて述べる。この打掛のデザインは主に前身頃に刺繍が施されており、後身頃にはそれほど刺繍はされていない（図14-1、図14-2）。また、前身頃の内側にも刺繍が刺されている。このことから前から見られることを意識してデザインされたといえる。出袴<sup>でぶき</sup><sup>10</sup>は、梅の花と松の葉が散らされたデザインとなっている。出袴に刺繍がほどこされるのは幕末以降であることから、この打掛が明治期のものであるということがみてとれる。打掛全体に施されたデザインを見ていくと鶴は、羽を広げ飛翔している様子を表した「飛鶴」が随所に見られる。また、亀は尾に海藻が付き蓑のようになった「蓑亀」が松のふもとにデザインされている。この他に「松鶴長春」を意味する松と鶴の表現、竹の葉（笹）、一直線の枝に蕾と花をつけた「檜梅」が確認できた。

### (3) 日本刺繍の技法

寄贈された打掛について、ここで細かく1つ1つのデザインにどのような刺繍技法がほどこされ

ているのかを述べていく。なお、日本刺繍の技法の特定については女子美術大学刺繍教室岡田宣世氏にご協力していただいた。

今回取り上げた打掛には、鶴、亀、竹など至る所に金糸が使用されている。この打掛では金糸を赤い糸でとめており、技法は「駒取り」である。

駒取りは使用する駒の数によって異なる名称があり、鶴、出袴の松の葉、竹、梅の枝は、図15の



図15 松の葉 片駒取り・上掛織

ように金糸の置き糸を1本ずつとじる「片駒取り」を使用している。また、亀、松の幹、土、岩、割橋紋は置き糸を2本ずつとじる「本駒取り」である。このうち、土、岩は本駒取りを用いた「駒詰め織」という手法を用いている。松の幹の目や亀の甲羅は「肉入れ」（別名：オランダ織）を使用することで立体感を表現している（図16）。とじ糸に赤を使用している理由は、華やかさを表すためであろう。さらに、打掛には色鮮やかな色糸を用いている。鶴に赤い色糸を使用しているところは、刺繍の上から模様や表情をつけていることから「上掛織」と判断した。この技法は別名「斜織<sup>はすめい</sup>」と呼ぶ。背の黒の色糸を使用している個



図16 亀 本駒取り・肉入れ



図17 梅 平織・片駒取り



図18 松 老松菱織菱

所は「一針掛」でV字を表している。梅の花(図17)、草に関しては「平織」という織い方で、草は2、3色の糸を撚った「撚り混ぜ糸」を用いている。苔は「相良織」、松(図18)は「老松菱織」である。

#### (4) 刺繍に用いられた色糸

刺繍の色糸について測色器<sup>11)</sup>を用いて計測を行った。その結果、松には4種類、梅の花は3種類の色糸が使われていた。松には淡い色が多く、主張し過ぎず白生地によくなじんでいる。梅の花にはピンクと白が用いられ、華やかな印象を受ける。さらに土や岩は3種類の色糸が使われ金糸と一緒に撚られている(図19)。

これらのことから、刺繍に用いられた色は金糸で刺された刺繍を引き立てると共に、白生地を生かしたデザインであると推察した。また、伊野本祥子氏の祖母が10代の婚礼時に着用した衣裳であるため、淡いグリーンやピンクなどを用いた、可愛らしい模様を彩る色彩になったといえる。



## 6. おわりに

以上の調査結果から、一般的に白打掛に刺繍が施されているものは少ないが、史料の打掛は刺繍だけで装飾を施しており、明治時代の婚礼衣装としてたいへん珍しいものであった。また、両家共に丹後ちりめん産業に携わっていたため、白生地そのものの良さを生かしながら華やかさを表現するために金糸や色糸を用いて刺繍を施したのではないかと推察した。刺繍技法からも明治時代の特徴を顕著に表している史料である。さらに、白生地は、異なる組織を組み合わせた「緞子縮緬」であることから、希少価値のある史料であることも明らかになった。

以上のことから、研究対象の打掛は明治期の婚礼衣裳の特徴を表し、丹後ちりめんの製織技術を存分に生かした打掛であり、史料価値のあるものと考察した。

最後に誌面をかり、史料を寄贈して下さいました伊野本祥子氏、本研究を進めるにあたり、丹後ちりめんについて示唆を与えて下さった北野裕子氏、ちりめんの織組織についての貴重な助言をいただいた京都国立博物館主任研究員の山川暁氏、丹後ちりめん卸問屋吉村商店様、女子美術大学刺繍教室の岡田宣世氏、その他ご協力下さった皆様によく感謝し、御礼を申し上げます。

## 注

- 1) 「丹後ちりめん」とは丹後織物工業組合で定められ、商標登録された表記である。
- 2) 『婚礼法式』とは伊勢貞丈によって記された婚礼についての書物。
- 3) 『貞丈雑記』とは伊勢貞丈が集大成し室町から江戸時代の武家のしきたりを記した書物。
- 4) 『婚礼罽粟袋』とは江戸時代の結婚指南書。
- 5) 「三枚襲」とは下から白紅黒と襲ねる着方。
- 6) 『現代結婚宝典』は、大正2(1913)年に発行された結婚について記した書物。
- 7) 弓岡勝美：着物文様事典いろは 明治・大正・昭和の着物、帯の図柄、ピエブックス、東京(2010)
- 8) 大隅為三：萬國圖案大辞典1、第一書房、東京、p.34(1976)
- 9) 大隅為三、同上、p.34、p.754
- 10) 「出袴」とは綿入りの裾のところで、裏地を折り返

して表地を縫い付け縁のようにした部分のこと。

- 11) 携帯型簡易測色 (PANTONE Color Cue TX) を使用。

## 参考文献

- 1) 秋山光男 日本刺繍、婦人画報社、東京 (1975)
- 2) 伊勢貞丈 [著] 島田勇雄 校注: 貞丈雑記 1、平凡社、東京 (1985)
- 3) 伊藤公一・和装正絹 白生地一実物貼付一、関西衣生活研究会、大阪 (1981)
- 4) 井筒雅風: 原色日本服飾史、光琳社出版社、京都 (1989)
- 5) 今井むつ子: 日本の刺繍、毎日新聞社、東京 (1976)
- 6) 石崎忠司 きものの染めと織、衣生活研究会、東京 (1979)
- 7) 浦野理一: 日本染織総華 刺繍、文化出版局、東京 (1975)
- 8) 江島其碩、尾崎紅葉: 世間娘気質、富士房、東京 (1903)
- 9) 江馬務: 結婚の歴史-日本における婚礼式の形態と発展、雄山閣出版株式会社、東京 (1971)
- 10) 大阪毎日新聞1928年9月28日
- 11) 大隅為三: 萬國圖案大辞典1、第一書房、東京 (1976)
- 12) 大隅為三: 萬國圖案大辞典6、第一書房、東京 (1976)
- 13) 小椋順子: 日本の古刺繍、源流社、東京 (1993)
- 14) 北野裕子: 「明治後期における丹後縮緬の多様性について」服飾文化学会誌、8巻、1号 (2007)
- 15) 北村哲郎: 日本の織物、源流社、東京 (1988)
- 16) 京都府京都文化博物館学芸第一課: 婚礼のいろと私たち、京都文化博物館、京都 (1997)
- 17) 京都金銀糸工業協同組合: 京都金銀糸平箔史、京都金銀糸工業協同組、京都 (1987)
- 18) 京都刺繍共同組合: 京繡技法集、京都刺繍共同組合 (2005)
- 19) 京都造形芸術大学: 織を学ぶ、角川書店、東京 (1999)
- 20) 切畑建: 染色の美9 日本の刺繍、株式会社京都書院、編集者 吉岡幸雄、京都 (1981)
- 21) 栗崎雅之: 日本の絹白生地、京都織物卸商業組合白生地部 (1996)
- 22) 小泉吉永 [編・解題]: 近世礼法書集成 第15巻 (婚礼)、クレス出版 (2008)
- 23) 視覚デザイン研究所: 日本・中国の文様辞典、視覚デザイン研究所、東京 (2000)
- 24) 島田勇雄、樋口元巳 [校訂]: 大諸礼集一小笠原流礼法伝書(1)、平凡社、東京 (1993)
- 25) 島田勇雄、樋口元巳 [校訂]: 大諸礼集一小笠原流礼法伝書(2)、平凡社、東京 (1993)
- 26) 城島栄一郎・矢井田修・中島照夫 共著: 基礎からの被服材料学、文教出版 (1997)
- 27) 昭和女子大学被服学研究室: 近代日本服装史、近代文化研究所、東京 (1971)
- 28) 田中千代: 新・田中千代 服飾辞典、同文書院、東京 (2000)
- 29) 中江克巳 縮緬 立体的な白生地、泰流社 (1977)
- 30) 長崎巖: 和のデザインと心 きもの、東京美術、東京 (2008)
- 31) 奈良文化財研究所: 絹文化財の世界 伝統文化・技術と保存科学、角川書店、東京 (2005)
- 32) 野崎誠近: 吉祥図案解題 一支那風俗の一研究一、ゆまに書房、東京 (2009)
- 33) 野村隆夫: 丹後=ちりめん誌、日本放送出版協会、東京 (1978)
- 34) 橋本榮次: 日本の刺繍、日本刺繍技術保存会、宝塚 (1998)
- 35) 風俗研究会: 現代結婚宝典、風俗研究会 (1913)
- 36) 増田美子: 日本衣服史、吉川弘文館、東京 (2010)
- 37) 山辺知之: 日本の染織 第6巻 庶民 近代、中央公論社、京都 (1981)
- 38) 山本らく: 刺繍 日本染織藝術叢書、株式会社芸艸堂、東京 (1972)
- 39) 弓岡勝美: 時代きもの 江戸・明治・大正・昭和の裾模様、グラフィック社、東京 (2007)
- 40) 弓岡勝美: 帯と文様、世界文化社、東京 (2008)
- 41) 弓岡勝美: 着物文様事典いろは 明治・大正・昭和の着物 帯の図柄、ピエブックス、東京 (2010)
- 42) 群書類従23 武家部、続群書類従完成会、東京 (1960)
- 43) 風俗画報402号、東陽堂、東京 (1967)

## 図版出典

- 1) 伊野本祥子氏提供
- 2) 伊勢貞丈 [著] 島田勇雄 校注『貞丈雑記 1』、平凡社、p.173 (1985)
- 3) 長崎巖: 和のデザインと心 きもの、東京美術、(2008)
- 4) 江馬務 結婚の歴史-日本における婚礼式の形態と発展、雄山閣出版株式会社、p.193 (1971)
- 5) 風俗画報: 402号、巻頭 (1909)
- 6) 7-1) 8-1) 筆者撮影 (顕微鏡写真)  
7-2) 8-2) 筆者作成
- 9-1) 奈良文化財研究所: 絹文化財の世界 伝統文化・技術と保存科学、角川書店、東京、p.67 (2005)
- 9-2) 10) 11-1) 12-1) 筆者撮影
- 11-2) 12-2) 筆者作成
- 11-3) 12-3) 大隅為三: 萬國圖案大辞典1、第一書房、東京 (1976)、p.34、p.754
- 13-1) 13-2) 14) ~ 18) 筆者撮影